

三重県沖に浮かぶ神島。  
純朴な若者の純粋な愛。

クラシック・シネマ

### 『潮騒』

三重県・神島現地ロケを敢行した撮影は素晴らしく、アコースティック・ギターによる音楽も相まって引き込まれます。吉永小百合と浜田光夫も明朗快活で健康的な魅力を発散。有名なたき火を挟んでお互いの裸身を見るくだりは何も見えないのにドキドキもの。

忠臣蔵の物語の影で、  
哀しく散ったひとりの武士の物語

クラシック・シネマ

### 『薄桜記』

五味康祐の同名小説を映画化し、大映時代劇代表作の一本に数えられている一作。市川雷蔵と勝新太郎という二大スター競演ながら、十八番である悲運の剣士役の雷蔵が断然光る。特に、雷蔵がごろごろ転がりながら見せるクライマックスの殺陣の独創性は映画史に残る素晴らしさ。

長崎→北海道。1970年の日本を縦断した、  
ある一家の愛と哀しみの旅路。

クラシック・シネマ

### 『家族』

山田洋次監督が倍賞千恵子主演で作った“民子三部作”の第一作。譬えるなら山田版『東京物語』。日本縦断のロケで撮影された1970年、高度経済成長末期の日本の姿、万博開催中の大阪は見もの。哀しみの後にやってくる希望に満ちたエンディングの素晴らしさは絶品！

連続婦女暴行殺人犯。  
彼に愛された女と彼を愛した女…。

クラシック・シネマ

### 『白昼の通り魔』

死に向かって進む男女4人の姿を描く純度100%の大島渚監督のアートフィルム。饒舌な会話で明らかにされていくのは愛の不条理、知性と無知の相克、そして女の逞しさ。インテリの大島映画常連俳優たちを、土の香りのする肉体と表情で死に追いやる川口小枝の存在感はすごい！

ラスト10分。凄絶なる原爆投下直後の長崎。  
その地獄絵図を直視しろ！

クラシック・シネマ

### 『この子を残して』

静かに緊張感を高めていく序盤、爆発の惨状を間接的に描く中盤、死が待ち構える中、真実を残そうとする主人公の姿を描く終盤と名匠・木下恵介の抑えたタッチが冴え渡ります。そしてラスト10分、大スケールで原爆投下直後の長崎を再現。その地獄絵図に込められた監督の戦争への怒りは腹にずしり！